この実だより

《第201号》
2015年8月号

発行者
社会福祉法人 札幌この実会
札幌市西区西野969番地
TEL. 011-663-2233

もいわサポートセンターを開所して

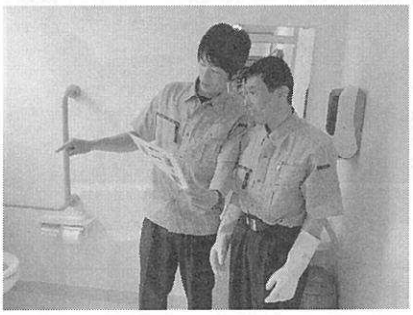
もいわサポートセンター
所長 石井 敏三

四月一日に「もいわサポートセンター」が開所してから早いもので四か月が過ぎました。

開所からの考えで「福祉的就労はしないし、させない」、「継続的な対処療法はしない」、「メンバーの五年、十年後を見据えた上での今必要な支援をする」、「どんなメンバーにも輝ける役割を見出す」という視点がぶれないように、ない頭をフルに回転させ、職員を叱咤激励し、また逆にメンバーや職員に支えられながら、なんとか毎日を頑張っています。

「お菓子工房ノワ」は、リピーターのお客さんが多く、お子さんから年配の方問わずご来店頂いています。

少しずつではありますが、メンバーや職員にも変化がみられ、難しかった仕事の内容や環境にも適応して活き活きと働いているメンバーの姿を見ると本当に嬉しいのですが「これって、職員の力じゃなくって、本当は彼ら本来の力なんだろうな」と、支援技術の未熟さに申し訳ない気持ちになります。



職員と一緒になって清掃箇所と作業手順を確認しています。

でも、毎日夜遅くまで「こんな支援方法があるんじゃないか」「こうしたらもっと理解してもらえるはず」とか、真剣にメンバーのことを考えている職員の姿を見ると、「もいわサポートセンターは、メンバーと職員が一緒に育っていけばいいじゃないか」という考えに辿り着きました。

また、加藤事長から常日頃言われてきた「彼らの幸不幸を握る怖さ」について、施設長という立場になって本当に痛感しています。「もいわサポートセンター」は、児童デイサービス、就労支援、短期入所の「多機能」の施設ですが、幼児期の支援、思春期の支援、成人期の支援は全く違い、私たちの支援方法によっては、その後の日常生活にすら影響を及ぼしかねません。ですから、開所からの考えである「メンバーの五年、十年後を見据えた上での今必要な支援をする」という視点だけは絶対にぶれてはいけないと思っています。

私たち職員は「先生」ではないので、「教育する」「指導訓練する」という立場にありません。彼らの得意でないところを支え、それに慣れて常態化することによって、気が付けば出来るようになっている…そんな自然な、そしておせっかいな「仲間」でいれたら良いなと思っています。

お子さんに合わせ「心」と「体」の成長を考えた療育を行っています。

法人内交換取材 第一弾

『札幌この実会』には西ブロックに二ケ所、南ブロックに三ケ所の事業所があり、それぞれに特徴をもって運営をしておりますが、同じ法人内でも他事業所のことはあまり知る機会がありませんでした。今回から西ブロックの職員が南ブロックの事業所を、南ブロックの職員が西ブロックの事業所を取材し、お互いの事業所の特徴や業務内容、現在抱えている課題等を学ぶことで刺激を受け合いながら、法人全体の質を向上させる事を目的として交換取材を始めました。この企画から、この実だよりの読者の方々に『札幌この実会』をより理解していただき、また制度や行政への要望等を考えるきっかけになれば尚良いかと考えています。

第一弾として、西ブロックのこの実サポートステーションの菅原淳矢とこの実支援センターの佐々木祐司が南ブロックの第2この実寮へ取材に行きました。

第2この実寮への見学を終えて

【はじめに】

私は第2この実寮へは、入社前の面接の時に一度、この実会にお世話になってからは、朝市の野菜が余った時くらいしか行ったことがなく、施設内にある資料からの知識しかありませんでしたが、この度ベテラン職員の木間さん・勝見さん・林さんから第2この実寮について丁寧に教えてもらいました。

第2この実寮食堂にて

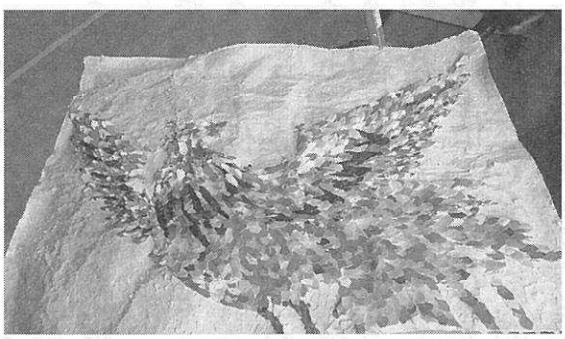
手稲この実寮自体が、親御さん亡き後の本人たちの暮らしを支える為にできた施設なので、この実会が立ち上がった頃から、親御さんを始め、職員・役員からも高齢者棟の構想があり、話が具体化していったという事です。

今第2が建っている場所は、元々は札幌市から訓練用地として借り入れたもので、現在は道路が舗装されてガーデンも整備され、眼下には街が開けていますが、当時はうっそうとした雑木林だったそうです。毎日、手稲この実寮から炊事班にお弁当を作ってもらい車で現場に行き、職員も寮生さんも一緒になって、木を切り草を刈ったり石をどかしたり等を人力で行っていたそうです。毎日ヘトヘトでしたが楽しかったと笑顔で木間さんがおっしゃっていたのが印象に残りました。寮生さんにとっても、自分たちの場所を自分たちで創り上げていくという事が、社会の一員だと実感できたことと思います。

当時の頑張りが伝わってきます。

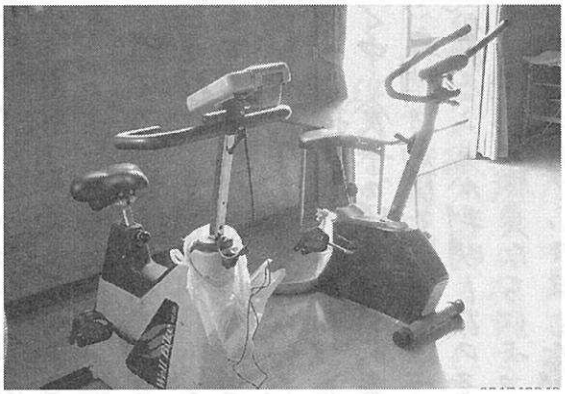
【日中活動について】

開所前からの流れで、開墾・畑作業・椎茸栽培をメインの日中活動として行ってきて数年経ち、体力が落ちてきた方や手先が器用な方たちのために、これまで箱折りや和紙を作ったりする活動を行ってきたそうです。ここ数年は趣味的、文化的な活動を中心に行ってきましたが、今年からは好きな事・やりたい事が同じ寮生さんで少人数のグループを作り、複数の職員が担当するグループケアの体制を試行しているそうです。そこで新人職員の育成・指導も出来るし、寮生さんにとっても、自分のホーム担当職員が不在の際に要望や困ったことをグループの職員に気軽に話せる環境になっているそうです。



寮生さんたちが協力して作りました。

活動の内容についてはベテランの職員もレク活動の専門家ではないので、色々と試行錯誤をしながら提供しているそうです。日々の生活の中で"○○サークル"というのを見かけては、形や体制を整えてみんなでやってみたり、実際に文化教室などに通ったりと、自ら学び、勉強しているそうです。また、音楽のボランティアが来てくれたりした時も「今日は楽しかったね」では終わらず、プロのしていることを吸収して如何に真似できるかを考えて、日々の活動を作り上げていることを聞いた時は、この実会全体として、寮生さんの平均年齢が上がっている中で、どこの施設も取り組み始めていると思いますが、改めてこれから提供していく日中活動について考えさせられました。



日々の肉体維持に励んでいる方もいます。

【医療機関との関わりについて】

年齢の高い寮生の生活を考えるときに、健康管理・医療が生活の中心ではいけないというお話が出ました。しかし健康面は暮らしや活動と並び、やはり生活を支える上では重要な柱の一つです。病弱な方が多い第2この実寮では、数年前までは年間の通院件数が一六〇〇件を超えていたというのは驚きました。通院には引率する職員が必要なので、回数が多いとその分日中活動の手がどうしても足りなくなるので、薬だけをもらう通院はやめ、本人が必ず行かなくてはいけない通院時に一緒に処方してもらうようにして、二重・三重にかかっていた年間を整理したそうです。これは医療費の軽減にもつながり、大切な寮生さんのお金を節約することになったそうです。

昔は病院も親身になって診てくれる所は少なく、西区にまで通っていたこともあったそうですが、近年はお世話になっている病院が南区内にあるそうです。また、医学の進歩や術後の管理の向上もさることながら、若いころに作業で基礎体力を身に付けていた事もあり、風邪くらいならサッと治ってしまう方が多いそうです。皆さん元気いっぱいで、たくさんパワーを頂きました。特に最高齢八十二歳の三名が、すいすいと階段を昇降りしているのには素直に驚き、私もその歳まで元気でいるぞ！と思いました。（菅原 淳矢）

【認知症への対応について】

取材の後半では、施設の特性上避けられない問題となる認知症について、生来の障がいに認知症的な症状が重なると、どの様なことが起こるのかを伺いました。

現在のところ認知症の診断がついている利用者は五名ですが、その予備軍らしき人になるとこの三倍くらいになるそうです。

具体的な症状としては、トイレに行こうとして途中で何をしているか分からなくなる、服が急に着られなくなる、夜間に部屋で動けなくなってしまう事がありますが、皆に共通して起こるのは食事を摂らなくなってくることだそうです。

こうした症状の出方自体は、基本的には一般的な高齢者の認知症と変わりないのですが、知的障がいを持っている人の場合、例えば物忘れや人の名前が出てこないといったことがあっても、それが認知症によるものか、元々の障がいによるものなのかの判断がつきづらいという問題があります。加えて精神的な疾患を抱えている人も多いので、そちらの方の症状と捉えてしまうこともあるといいます。そのため障がいの重い人ほど発見が遅れてしまう傾向があるのだそうです。

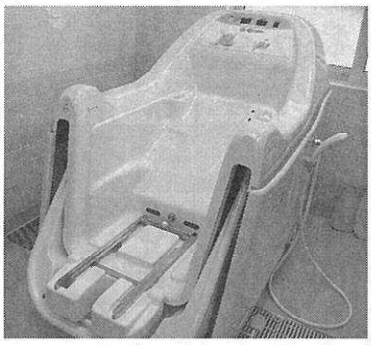
第2この実寮では、十年程前に初めて「食べない飲まない」というケースが発生しています。ある日急にコーヒーやお茶を飲まなくなって戸惑っているうちに、健康診断の血液検査で脱水症状を起こしていることが判明したのです。

そこで慌てて水分を摂らせようとしたものの、経験を積んできた職員たちにとっても初めて直面する事態だったため、当初は思うような処置がなかなかできなかったそうです。医療機関と連携を取りながら出来る事を継続していく中、食事を摂らなくなるまで症状が進行し、専門の病院で脳の萎縮（＝認知症）に原因があることが判明したのですが、対応については現場の職員たちによって一から試行錯誤が重ねられていきました。現在では、かつて食事が摂れなくなった重生の方たちも、普通に食べられるようになったと聞き大変驚かされました。

こうした取り組みを間近で見てきた勝見さんは、高齢化によって認知症や精神疾患の症状が顕著になってきた場合の薬（向精神薬）のコントロールの重要性について話してくれました。医療機関との連携をしっかりと行うことで、その人に合った形で投薬がなされ、本人が穏やかに暮らせるようにしていくことが大切だとのことでした。

このお話に重ねて、林さんも経験談として『職員の一生懸命な想いだけで相手を看ていこうとすると、職員も本人もだんだん辛くなっていくことがある』と語っており、そこから「お互い辛いというようになる前に、薬と上手く付き合っていくことが大事だ」という考えに至ったそうです。

木間さんはこうした加齢に伴う認知能力等の変化については、認知症や知的障がいの重度化、精神的な症状の発症など幾つかの原因があるが、そのどれが原因なのかということはあまり本質的な問題ではないと言います。今の自分たちにできることの限界を踏まえた上で、「本人さん一人一人の状態に合せてどう支援していくか」ということこそが一番大切なのではないかと強調されていました。



入浴の仕方も一人一人の状態によって違います。

【これからの課題について】

最後に木間さんにこれからの課題について伺うと、ここが本人さんたちにとって「終（つい）の住みか」になりえるかということをポイントとして挙げてくれました。第2この実桑のような（医療機関ではない）福祉施設の中で、これから先どこまで本人さんたちの暮らしを看ていけるのか。例えば、寝たきりの状態になっても施設の中でケアできるのか？、胃瘻や経管栄養の状態になったとき、痰の吸引が必要となったときはどうなのか？。また、そうなった場合に現状の建物設備に加えて、新たな設備や療養棟のようなものが必要となってくるのか…。本人さんの状態やご家族の考え方はそれぞれなのでケースバイケースになりますが、これから施設全体で一つ一つの事案について、どうあるべきかを検討していかなくてはならないでしょうとのことでした。

だからこそ、そうなる前に本人さんたちに「日々の暮らしをいかに楽しんでもらうか」が大切なのだと木間さんは強調します。健康を維持できるようなケアや心地良い暮らしをどう提供していくのか。『障がいを持って生まれてきて嫌な人生だったと思うのか、障がいはあったけど家族や仲間、職員に恵まれて楽しかったなと思うのか』という加藤豪長の言葉を引き合いに出しながら、たとえだんだんと判断力や反応が無くなってきたとしても、どう七分からないから何もしないということではなく、本人やご家族が望むこと、望むであろうことを職員がどれだけやってあげられるかが重要なのだと話され、その最後を『効率や理論といったことを超えたところで、泥臭くともこれからも試行錯誤を続けていくことになるでしょう』と結んでくれました。

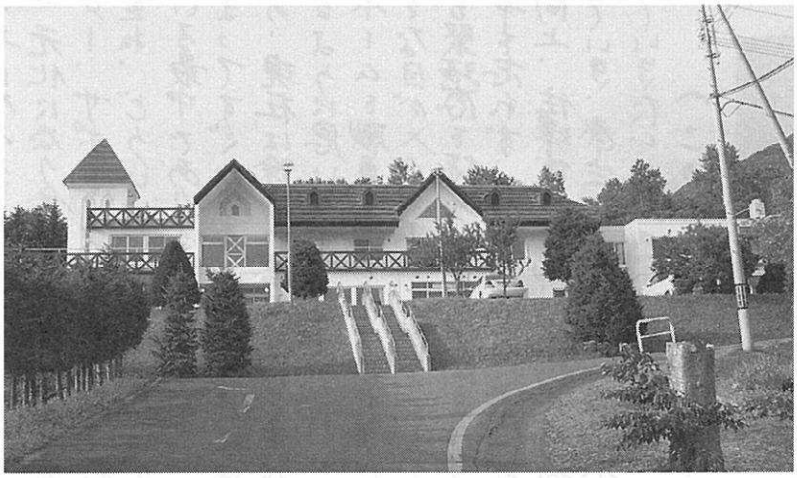
【取材を終えて】

認知症との関わり方については、今後の仕事の上でもぜひこの機会にお聞きしたいと思い質問させてもらったのですが、皆さん当時を振り返りながら、初めて経験する事態に奮闘されていたエピソードを活き活きと話してくださいました。和やかなお話の中にも、随所にこれまで取り組んでこられたことの重み、凄みがありました。

お話の最後に、これからも試行錯誤は続いていくと話されていたのがとても印象に残っています。開所から二十二年を経ても、未だにこうした気概を持って仕事に向かわれているところに、手稲この実桑の草創期から脈々と継承されてきたものを見た思いがしました。

お忙しい中、快く取材に応じて頂きまして、本当にありがとうございました。

（佐々木　祐司）



見晴らしの良い環境の中
皆さんのびのびと過ごされていました。